別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：　李　英蘭

李　英蘭氏の博士号請求論文「現代韓国語の「-n kes-ita」文に関する考察－「主題－解説」構造の観点から－」は、文末に「-n kes-ita」を伴う現代韓国語の文、すなわち「-n kes-ita」文（以下、kes-ita 文)を「主題－解説」構造の観点から考察し、その基本的な機能と意味解釈のプロセスの全体像を示そうとしたものである。

論文は全 10 章から成る。第 1 章「序論」では、kes-ita 文についての先行研究には、統語構造に基づく分析とモダリティ表現としての分析に二分する傾向があり、そこから生じる問題点がある。それらを解決するためには、kes-ita 文の統一的な分析が必要性であるとして、本論文の目的として、kes-ita 文の統語レベルでの再分類、その意味解釈のプロセスの提示、また、意味レベルの基本的な機能の分析という 3 点を掲げた。

第 2 章「先行研究とその問題点」では、先行研究を概観し、その問題点を大きく 3 点指摘した上で、先行研究が分析対象としなかった種類の kes-ita 文を含め、kes-ita 文の全体に対する本論文の分析方向を示した。

第 3 章「理論的枠組み及び研究方法」では、kes-ita 文の kes の名詞性の度合いを 5 つの構文テストで測り、kes-ita 文を「名詞文としての kes-ita 文」「疑似名詞文としての kes-ita 文」「非名詞文としての kes-ita 文」と、統語的に 3 分類することを提案した。「非名詞文としての kes-ita 文」は先行研究では、ほとんど分析対象とされなかったものである。また、kes-ita 文の意味解釈の分析枠組みとして、「主題－解説」構造を提案し、kes-ita 文の基本的機能の仮説を提示した。本論文が仮説として提示する kes-ita 文の基本的な機能は、「主題－解説」構造の中で、「主題についての解説であることを示す」ことであるとし、聞き手は、同一文内に主題が明示的に現れていない場合は、先行文脈や発話状況などから主題を探し、kes-ita 文の意味を「主題について何かを述べている」と解釈するというものである。

第 4 章「名詞文としての kes-ita 文」では、「kes が具体的なものを指し示す場合」「kes が抽象的なものを指し示す場合」「kes が名詞化辞として働く場合」のように 3 分類できることを示し、kes の指示対象の意味拡張の仮説を提案した。名詞文としての kes-ita 文がいずれも意味的に「主題－解説」構造を有していることを明らかにし、その意味解釈のプロセスを示した。

第 5 章「疑似名詞文の kes-ita 文」では、「主題－解説」構造に基づき、kes-ita 文が表す解説が主題についての「言い換え」「結果」「理由」「主観的解釈」となっていることを明らかにしたうえで、その意味解釈のプロセスを示した。

第 6 章「非名詞文としての kes-ita 文」では、kes に名詞としての機能がないことから、「名詞文としての kes-ita 文」とも「疑似名詞文としての kes-ita 文」とも構造的にも意味的にも異なることを明らかにし、非名詞文としての kes-ita 文は、聞き手によって「後続発話への関連を示唆する」ものとして意味解釈されることを論じた。その意味解釈のプロセスを示した。

第 7 章「二次的な意味が現れる kes-ita 文」では、「名詞文としての kes-ita 文」と「疑似名詞文としての kes-ita 文」が、話し手と聞き手が置かれた状況などのコンテクストによっては、「当為判断」「忠告・命令」などの二次的な意味を帯びて解釈される可能性について論じた。

第 8 章「kes-ita 文の意味解釈プロセス」では、以上の分析を踏まえ、kes-ita 文の意味解釈のプロセスの全体像を示し、kes-ita の基本的な機能について検討した。3 章で提示した kes-ita 文の「主題－解説」構造の仮説を修正し、名詞文としての kes-ita 文、疑似名詞文としての kes-ita 文、非名詞文としての kes-ita 文のいずれにおいても、その意味解釈における kes-ita の機能を、kes-ita で表される部分以外に、もう 1 つの情報が必要であることを示すことであると再定義することで、3 種類の kes-ita 文に統一的な意味解釈が可能になることを論じた。その上で、統一的な kes-ita 文の分析の妥当性を主張し、3 種類の kes-ita 文の意味解釈のプロセスを示し、kes-ita 文の全体像を網羅的に捉えることが可能となったと論じる。

第 9 章「kes-ita 文と日本語との比較」では、日本語の文末表現のモノダ、コトダ、ノダの用法と kes-ita との対応関係を考察した。モノダ、コトダ、ノダと kes-ita が対応する場合は、kes-ita 文が「主題－解説」構造をもっており、主題が、話し手と聞き手がお互いに認識し共有していることが明確であり、主題が何かが明確である場合のみであることを明らかにした一方で、kes-ita 文には、話し手の心的態度を表すというモダリティ表現としての機能がないことを示唆した。

第 10 章「結論」では、第 1 章「序論」で提示した本論文の 3 つの目的に即して本論文の分析結果をまとめ、本研究の意義を述べ、今後の課題に言及している。

以上が本論文の概要である。本研究の学術的意義については、以下の審査結果が得られた。

第一に、これまで kes-ita 文の研究は、日本語のノダ文との比較対照研究による分析が多かった。それらの分析は、kes-ita の意味機能そのものを分析するのではなく、ノダ文の意味機能や分析枠組みを前提とした分析であったため、kes-ita 文の全体像を捉えることが難しかった。本論文では、kes-ita 文と日本語のノダ文の対照分析を研究の主軸とはせず、純粋に kes-ita 文の全体について分析し、その統語構造と意味機能を明らかにした上で、日韓対照を試みたこと。

第二に、先行研究の問題点を指摘した上で、先行研究がほとんど扱わなかった kes-ita 文を含め、kes-ita 文のヴァリエーションを統語的に「名詞文」「疑似名詞文」「非名詞文」に分類し、それらの異同を「主題－解説」という意味関係で一般的に捉えようとしたことにより、kes-ita 文の意味解釈の全体像に迫ることができたこと。

第三に、3 種類の kes-ita 文の分析結果をもとに、kes-ita 文を日本語のノダ文、モノダ文、コトダ文と比較対照することを通して、kes-ita 文と日本語の諸形式との共通点を明らかにし、一方で、kes-ita 文の場合、意味解釈に関わる聞き手の「推論」の適用範囲が日本語に比べて狭い可能性を明らかにしたこと。

これらの点は、査読委員より評価された。今後、本論文執筆者が今後の課題とする、平叙文以外の kes-ita 文を対象とした研究成果が期待される。

とはいえ、改善の余地がないわけではない。審査では、いくつかの指摘がなされた。

第一に、kes-ita 文を 3 種類に分類し、各々について分析を試みたが、その 3 グループの間で中間的な現象を示す事例がなかったか。あったとしたら、そのような例が示唆することは何か。

第二に、日韓対照を論文の主軸からはずしたが、9 章の日韓対照分析からわかる kes-ita の kes の名詞の実質性がノダ文のノのより高いということが何を示唆するか。

第三に、「主題－解説」の意味解釈が聞き手の側からの記述になっているが、話し手の発話意図をどのように考えるか。

第四に、意味解釈上の「主題－解説」構造に関連して、例えば、日本語のハは主語か主題かで、文構造上の位置などに違いがあると分析されることが多いが、この論文の「主題」についてはどうか。

しかし、これらの指摘は，本研究の根幹を左右するようなものではなく、また多くは論文執筆者の将来の研鑽に期すべきことがらであり、本論文の大きな学術的貢献をいささかも損なうものではない。

以上の理由により、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。